

音声言語の手話言語に対する影響：中国手話と韓国手話における借用語

イ・ヘジュン

(中国・復旦大学)

よく知られているように、我々は強力な支配的言語である聴覚・口腔に基づく音声言語に取り囲まれている一方で、手話言語はろう者の用いる視覚・空間（身振り）に基づく少数言語である。支配的言語が少数言語に本質的な影響を与えること、及び2つの言語が接触することによって、仔細に見たときに、音声言語からの文法的借用が殆どの手話言語に見られることは明らかである。手話言語と音声言語の間にはクロスモダリティー的な出力が存在している。特に東アジアにおけるこの領域における初期の研究では、文法的借用がどのように行われているかについては、非常に限られた研究が行われているだけだった。手話言語が、独自の構造を持つ独立した言語であることは、広く認められているが、音声言語と同様に、独自の制約パラメーター規則や戦略を用いる非生得語彙や外来語の形式を持っている。それゆえ、発表者は中国手話（CSL）と韓国手話（KSL）の比較によって、これらの借用語の語彙特性を分析することから始めた。調査された形式は、共通して翻訳借用とそれぞれ中国手話記号や英語手話記号（ピンイン）そして韓国手話記号（ハングル）の使用の組み合わせからなっていた。これら2つの手話言語のデータは、個別の1名もしくはそれ以上の話者の個人的なビデオ録画からなっている。加えて、手話による放送プログラムが、コーパスのサイズを大きくするための事例を与えるために分析された。ほとんどすべての会話は2015年から2016年の間にELANを用いて、2人の生え抜きのろう者の助けを得てタグ付けされた。中国手話（CSL）と韓国手話（KSL）は、総じて認知の諸相がどのように音声言語と相互作用するか、また同様にモダリティーがどの程度この相互作用を形作るかを発見する独自の視点を与えていた。ここで議論するように、手話言語の語彙目録を定義しているのは身振り事象のアイコン性だけではなくて、周辺の音声言語や初期言語に絶えず影響を受けている通言語的に異なる構造によって引き起こされる視覚事象の複雑な恣意性でもあるのである。これが、ろう者のコミュニティーとそれ以外の聴者の社会との密接な言語接触のクリティカルな点である。このプレゼンテーションでは、手話言語学の領域に従事する人々を適切に導くための別の視点も導入されるだろう。手話言語のクロスモダリティー的な言語学的研究に基づく、さらなる科学的で論理的な研究が求められていることも明らかである。

キーワード： 中国手話（CSL）、韓国手話（KSL）、言語接触、非生得語彙、外来語彙、借用語